

『はじめに』 地方の時代の掛声と共に、地方都市の問題も様々な観点から論じられている。圏域構想、地域の歴史や社会的意味、地域経済、居住環境、交通現象、景観等。だが、問題点の多くは広域的な行政区画について経済的合理性を基盤に語られ、土木工学的観点からは特に交通が重視されてきた。そのため、低レベル圏域(近隣基礎集落圏等)の問題は、地区計画の制度化以降も欧米の形態をモデルとして論じることに終始し、明確な基盤概念を形成していない。本研究の目的はそうした低レベル圏域に関する問題を総合的に検討することにある。

まず、これまでの考察から、居住者は居住地区に対する交通性の高いイメージを保持し、子供のイメージが体験を通して大人のそれへと統合されていくことを示した。現象面についても、交通手段の自動車化(街路の道路化・道路パッドス)の問題点、近隣形態とその面積分布などと子供のイメージとの関連性、居住世代の地域的不均衡についても論じてきた。^{21,23)}そこで今回は以上の点をさらに明確化するため小学生対象の継続調査、児童・父兄に対する意識調査を実施し、地区に関する意識の世代差、学童のイメージの地域差について若干の成果を得たので報告する。

【1】調査 継続調査は過去の (1) 松本市成器西小学校(松本市成器西地区、市制前松本市域の人口約3万人の松本市中心部)、(2) 福井市順化小学校(区画整理が完了し交通量が増加する人口約24万人の福井市中心部)²³⁾の調査結果と比較するため、福井市郊外に位置し、校区が新興住宅団地と古い農村集落を含むと共に、旧国道八号線に貫通されている麻生津小学校の学童(3年生:77名、6年生:82名)を対象とした。調査法は(1)、(2)と同様で、A.白紙上に被験者の行動圏の概略図を描いてもらう。B.航空写真(インフラ概略図の1)に透写紙をかぶせ、自宅・学校・近隣の区画・よく通る道・車両進入の好ましくない道・行動圏域等を描いてもらう。の2種である。さらにA.Bとも、地区内で心に残る場所・日常的移動手段・好きな移動手段・安心して遊べる場所・放課後休日の双方に関して何処で何をして遊ぶかについての付随調査を実施した。

一方、意識調査は予め準備した調査用紙を配布し、生活環境に関する29項目の個別評価と総合評価をそれぞれ5段階で回答してもらうものを学童についてA.Bと同時に実施し、学童の父母については項目を42(29項目は共通)を増やして後日回収の形で小学校に依頼した。父母に関する回収率は95%(回収数:3年生:73,母:73;6年生:76,母:77)であった。

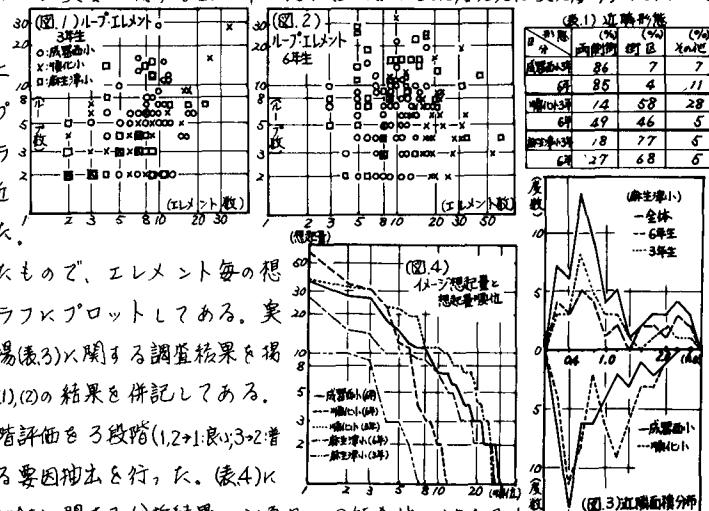
【2】調査結果の整理と考察

(2-1)結果の整理 Aの結果は概略図上に記された要素(建物・場所)等を横軸、ループ数(通った区画数+2)を縦軸として両対数グラフに表記した(3年生:図1,6年生:図2)。Bでは近隣形態(表1)と近隣面積(図3)の分布を示した。

(図4)は地区内で心に残る場所等を集計したもので、エレメント毎の想起数とその順位を縦横軸として両対数グラフにプロットしてある。実態調査についても、移動手段(表2)・遊び場(表3)に関する調査結果を掲げた。また各図表には比較のため前述の(1)、(2)の結果を併記してある。

一方、意識調査結果に関しては、5段階評価を5段階(1,2+1,3+2+3+2+1)へと変換し、数量化Ⅱ類による要因抽出を行った。(表4)には調査項目と共に、両親の44項目(2種属性除く)に関する分析結果、31項目の回答全体に対するもの、及び世代差・父母の差を見るための学童・父・母の各回答に対するものの5種について併記してある。

(2-2)継続調査に関する考察 (図2)より麻生津地区(XF(3)とZF(3))学童のイメージマップ特性は、(1)に比べて近年で経路マップ的傾向(ループ数が多い)が目立つものの、6年では配置マップ的傾向を強く示ようになる。(図4)でも



(表.4) 数量化Ⅱ類による分析結果 [7]

3年は想起も貧困で移動の少なさを示し、6年は(1)の3.6年同様想起も多く分散化も強い。以上の点と安全な遊び場も多様にもつこと(表3)について(2)と比較すると、(3)は(1),(2)の中間的な環境にあると推定される。そして、この差異について(表1)(図3)との関連が考えられる。(1)で近隣の大部分を占め面積も安定した両側町が(2)で5割、(3)では4%すぎない。区画整理(2)や宅地開発(3)が自動車交通への適合を計り、近隣面積をも拡大させている。近隣形態とは道に関する意識の問題でもあり、自動車交通量とあいまって学童の生活圏やイメージに大きな影響を及ぼしている。問題は恐らく道と交通状況にある。しかも学童の4は既に歩行等の代替としての車志向を持つ(表2)。だが、この問題の解決を計る場合、交通の現況に関して自動車交通への適応(2)(3)と望ましいはずの伝統的町屋群(1)が全く逆の問題を生み、道路と自動車交通も無視できないのも事実だ。地方都市の課題はその調整にこそある。

(2-3)意識調査に関する考察 本節では先の問題点への対策も考える準備として、数量化Ⅱ類による分析結果を検討する。まず44項目(表4)Ⅰでは①居住地要因11,15 ②交通関連41,44,16,17 ③利便性43,20,23がレンジで高順位を占める。安全性項目は44のみで、全般的に地区内外に関する利便性が強く意識され、特に22より23、19より41が高く大型店・道路の位置づけが興味深い。次に31項目では学童①1,5,7,3,9,6,8,12、②14、③23,27,29,26,28,21、父親①1,3,11,6,12、②19,16,15、③23,27,24、母親①3,12,1,5、②15,18,19,13、③28,23,29の順位が高い。三者に共通して高いのは①1,3,12②23だが、3/12、そして15などでは父子と母でスコアの正負が逆転しており、意識差が認められる。三者を比較すると、Ⅰと同様用心、道路整備や、大型店・国鉄駅・バス停・小学校の近さなどの利便性が高順位にくると父親と同等の傾向が強い母親の意識が目立ち、父親の27以外の安全性項目の順位は低い。ところが、学童では重要な居住地要因、近所づきあい、除雪の設備、道路の安全などが高順位を占め、両親と共通の23を除くと利便性でも生活の場との密着性を示す要因が高い順位にある。以上の点から、結果についての地区的な限定はあるが、前節の問題点は親子の意識差に既に存在していることがわかる。そして、解決策は学童を被保護者として与えることでなく、現状では考慮されていない被害の意識と地区計画に生かす形で反映させることにあり、便利さが安全さを、特に道に関して論議すべきであることが示されている。

(2-3)意識調査に関する考察 本節では先の問題点への対策も考える準備として、数量化Ⅱ類による分析結果を検討する。まず44項目(表4)Iでは①居住地要因11,15 ②交通関連41,44,16,17 ③利便性43,20,23がレンジで高順位を占める。安全性項目は44のみで、全般的に地区内外に関する利便性が強く意識され、特に22より23、19より41が高く大型店・道路の位置づけが興味深い。次に31項目では学童①15,7,3,9,6,8,12、②14、③23,27,29,26,28,21、父親①13,11,6,12、②19,16,15、③23,27,24、母親③12,15、②15,18,19,13、③28,23,29の順位が高い。三者に共通して高いのは①13,12②23だが、3/2、そして15などでは父子と母でスコアの正負が逆転しており、意識差が認められる。三者を比較すると、Iと同様用心、道路整備や、大型店・国鉄駅バス停・小中学校の近さなどの利便性が高順位にくる父親と同等の傾向が強い母親の意識が目立ち、父親の27以外の安全性項目の順位は低い。ところが、学童では重要な居住地要因、近所づきあい、除雪の設備、道路の安全などが高順位を占め、両親と共通の23を除くと利便性でも生活の場との密着性を示す要因が高い順位にある。以上の点から、結果からつづめる地区的な限定はあるが、前節の問題点は親子の意識差に既に存在していることがわかる。そして、解決策は学童を被保護者として与えることでなく、現状では考慮されていない低学年の意識と地区計画に生かす形で反映させることにあり、便利さが安全さを、特に24に関して論議すべきであることが示されている。

[3] まとめ 最後に以上の考察を基に幾つかの点を強調したい。第一は近隣に関し、両側町を基盤概念とすることの提起である。この形態は道に関する意識とも結びつき、地区の安全性を考える上で重要な伝統的概念を含む。但し、これは道路網と如何に組み合わせるかは今後検討すべき課題である。第二は学童の計画への参画である。彼等はいくつもの意識をもち、その地域の状況に最も影響される生活者、そして将来の地区の担い手だからである。第三は小学校の果たす役割である。常に問題点を採り論議できる場所、調査の急の地区センターとしての重要な役割を果たせる位置にあり、本研究はその可能性を示す一つの提起である。最後は施設化の問題。遊び場施設を子供の困り処みの場としてはならないということだ。学童は地区の機軸により様々な問題を学び、将来の地区の在り方を考える糧とする必要がある。このことは別の意味の教育である。施設化に問題がないのは、むしろ共同駐車場などの交通関連施設だと考える。今後は上記の点についてより具体的な検討を進めたい。

〔おわりに〕本研究は、福中麻生津小学校教育職員、父兄、生徒各位の御協力、本校卒業生大塚、飯塚、江守、干代谷、前田各君の協力に欠くことがない。ここに感謝の意を表したい。

(参考文献) 1) 土木計画学研究委員会講演集4, p34~36 (1982) 2) 土木学会第38回年報摘要集 IV-98, p195~196 (1983) 3) 土木学会第39回年報摘要集 IV-4, p7~8 (1984)